

# あなたためて

〈家庭の同行27〉

## 引きだされる力



NPO 法人くだけけ会代表

和田重良

1948年小田原市生まれ  
くだけけ生活舎での共同生  
活（人生科や農作業）を  
おして、青少年や家庭の生  
活にさまざまなメッセ  
ジを送っている。

## 「欲望」と「教育」

「人間は欲望の束である」（和田重正）という言葉からはじまって、「人間の教育」を深く考えることが必要となってきます。

確かに「欲望の束」なのですがその欲望をどのようにつまみ、どのように扱えばよいのか一般にあまり

語られていません。宗教という分野では少しまともな考えている人はいますが、「教育」の中では性欲・食欲を少し扱っている以外はあまりお目にかかれませんか。

### 「くだけけの教育」の中心テーマ

子どもの意欲が失われたり、変な方向に行ったり、行き詰ったりしてしまうより、意欲満々で「よい人生」を送ってほしいと誰でもが願うことと思います。ところがその意欲の元となる「欲望」についての無理解から、おどしや押しつけや焦らせたり、見えすいたホメ言葉などを並べて、要するにアメとムチで自分勝手な理想像に合わせて何とかやらせようとするのです。

その結果、基本的な欲望についての理解がないため、「人間の教育」の最も大切な「自己発見」「自己探求」「自己創造」といった視点が抜けてしまうのです。

平たく言えば「自分が生きているんだよ」という視点が抜けてしまうのです。

そこで「くだけけの教育」では「欲望の高次元化」ということを中心テーマとしています。

またまた平たく言えば「勉強をやらせる」のでは

なくて「勉強したくなるボクってなんだろう」と感じてほしいということ。（勉強したくないボクって……）でもいいのです。欲望は旺盛な方がいいに決まっています。行動が意欲的になるわけですから。ただ、それが、どういふ方向性を持つのがよいのかという所に「教育」の一番大切なポイントがあるのです。

### 次元を高める

いつか「欲望の取り扱い説明書」を作ろうかと思っていますが、欲望には次元の違うものが入り混じって存在しています。次元の高い方の欲望に到達すると、次元の低い方の欲望はあっても邪魔にならないといった仕組みになっているのです。

では次元が高い欲望って何なのでしょう？

「本能にくつついている基本的欲望」……食欲・性欲など……これがないと人間は生きて行けません。

そして、そこから派生してくる「自己拡大欲」というのがあって「自分」をどんどん大きくしていくための地位・名声・学歴・肩書き・財産といったような欲望を生んでいきます。

そういうのはだいたい「世俗欲」と呼ばれていて「この世の中をウマク渡ってやろう」とする欲で、

総じて「勝ちたい欲」です。

行き着く先は私有・所有の満足です。これもまあ大事なことでありますが、これだけを押しつけていたのでは本当の幸せには至りません。

一方で「自己完成欲」と呼んでいます。これは自己発展の方向がより「深いあんしん」の方へと向かっていきます。

言いかえれば、所有しているものというのは取られてしまったら大変だという不安が生まれるのですから、それとは別の価値観を持つということがヒントになります。

その先には「自他共存」という、もうちょっと自分を大きく活かせる次元があります。

商売などでも、ガツガツかせぐんじゃなくて「人に喜んでもらえる」といういい仕事をして成功している人はたくさんいます。

学校などでも先生の気のすむように偉そうにばかりしていないで「子どもたちに本当によるこんでもらえる教育」すればいいのです。

さらに、自分と他人（相手）とかの区別のない「よい生活」を求める次元があります。「くだけけ」で言っている「同行教育」というのはそこら辺の次元です。

親や教師が一所懸命に「道」を求めて精進していく姿こそ教育なのです。

### いのちの智慧

最も次元の高い欲望にたどりついたとしても、最も本能に近い、本能にくつついた欲望がなくなるわけではありません。食欲も性欲もあるのが健全です。知らん顔するわけにもいきません。

ただ、そこから派生する世俗欲に無闇にひきずられなくなるのです。

「子ども」から「おとな」になっていく道筋と似ていますね。

四十になり五十になってようやく人生の入り口に到達し、実は子どもの時分から頭と体の奥底で知っていた「いのちの智慧」に本格的に出会っていきま。そこで初めて「いのちの満足」というものの確認ができていくのです。

「教育」って本当は一生という長さでみていく「しあわせ」のことなのです。

### 自然の風景

#### おみおつけの中の菜の花

春が待ち遠しい寒い朝のこと

母はおみおつけの中から小さな粒々を箸の先につまみ上げて、世にも明るい笑顔を、

「まあ、菜の花のつぼみ……」

母は、軟らかいこの宝ものを、どう扱い、どこへ置こうかと惑っていた。

大事な宝もの、春のつぼみ。

母はどんなに貴いものに思ったか、幼い私にもわかっていった。

五十年たって、うちの大きな娘が同じことをして見せてくれた。

「？……」驚いていると、

「おとうさんの影響よ」と娘は説明した。

私はおみおつけの中に春を見つめるしぐさをいつのまにか母から受け継ぎ、娘に伝えていたらしい。



和田重正著「山あり、花咲きて 父母いませり」より